

## ◆障害学生の修学支援◆

## 第四回 情報保障と障害補償

筑波技術短期大学助教 石田久之

今回は、授業やその他の学生生活の場でのような配慮がなされているのを見てみます。

## 聴覚障害学生の学習保障

学習保障については、聴覚障害学生への支援に関する報告が多く、特に、講義内容をどのようにリアルタイムで提供するのかがという点に集中しています。障害学生には、「後でノートを見るだけでは授業に参加していることにはならない。その場で先生の言っていることを理解し、他の学生と同じ時間を共有したい」という強い希望があるからです。

五月号で述べたループアンテナやFM補聴器などの補聴システムの設置と同時に、手話通訳やノートテーカーの配置などにより講義保障が行われています。しかし、その支援者の確保の難しさが課題となっています。学内はもとより地域の手話通訳・ノートテーカーのサークルなどと連携したり、支援スタッフを学内で養成したりしていますが、ノートテーカーは要支援者

の五〜一〇倍の人員が必要と言われ、その確保には大変な労力が必要というお話をよく聞きます。しかし一方で、支援スタッフ（多くは学生）に過度の負担をかけないために一週間に二コマ以内というような制限も必要だということです。

また、授業担当教員がノートテーカーのことを知らず、授業中に当てるというような笑えない話もあるようです。どんな支援がいつ行われているのかという情報の提供・共有が必要です。聴覚障害学生については、この他、発声・発音に関連して語学の授業の困難さと、これに対する字幕挿入ビデオや視覚教材を用いた講義保障などが報告されています。

## 視覚障害学生の障害補償

以上のような聴覚障害学生への「情報保障」に対して、視覚障害学生への支援はある程度限定されています。なぜかと言いますと、視覚障害者は、「墨字へのアクセスと歩行（移動）」の二つの点に大きな困難があるのですが、教室内では主に、「墨字へのアクセス」、つまり、文字の問題に限定されます。墨字とは我々が通常用いている（今、皆さんが読んでいる）文字のことですが、盲や重度弱視（重度視覚障害）の学生には、資料を墨字ではなく点字で作成します。また、軽度の弱視学生には文字を拡大して提供します（本当は、ただ大きくすれば良いというものではないのですが、詳細は省きます）。これらの作業

が視覚障害学生への支援の大きな部分を占めます。最近では、授業の中でビデオを見せたり、パソコン画面をプロジェクトで映したりもしますが、画面をできるだけ言葉で説明することが重要です。あらかじめ内容を点字にして配布するという配慮も必要です。「障害補償」機器として拡大読書器やパソコンに接続されたピンディスプレイの整備などがありますが、前者は一五インチテレビ程度の大きさがあるので、授業を受けている他の学生の邪魔にならないような配慮も必要です。

また、視覚障害者の中には、明る過ぎると頭痛がしたり、授業に集中できなかつたりという人もいるので、そのような場合は窓から離れた席にするということも必要です。

さて、「先に「情報保障」と「障害補償」と書きました。「ほしよう」の字が異なっていますが、間違えたわけではありません。こんな風に考えてください。情報量を保ったまま、低減せずに提供しようとする仕組みを「情報保障」、情報量を低減しないように障害を補って受け取る仕組みを「障害補償」と言います。送り手と受け手という視点の違いなのですが、前者は聴覚障害関係で、後者は視覚障害関係でよく用いられる言葉です。重度視覚障害学生のもう一つの困難、移動についてですが、これを授業との関連でみると、体育などの実技や実習に配慮や支援が必要となります。バスケットやテニスなどはできません。こんな場合には他のスポーツに代えます。ルームランナーなど

を利用した屋内トレーニングやプールでの水泳が可能です。盲の学生が保育園で実習を行ったという新聞記事を見たことがあります。教育実習を他に代えるということとは難しいので、かなり苦労したのではないのでしょうか。指導教員の訪問など、細やかな配慮が大きな支えになったことと思います。

## 支援スタッフ

さて、私はソフト面の問題に入れているのですが、支援を行う人（支援学生・支援スタッフ）に関して、ちょっとした混乱があります。現在ほとんどの大学で、障害学生支援の実際の活動を担っているのは、同じ大学に在籍している、つまり障害学生の中にいる健常学生です。

しかし一口に障害学生を支援する学生といっても、その形態には様々なものがあります。ボランティア、「有償」ボランティア、アシスタントスタッフなどの名称があり、また内容的にも、支援活動に謝金がある場合、ない場合、実際に支援を行う人、その支援者と障害学生の間を取り持つ（コーディネーター）人など、支援スタッフの業務内容や必要な能力、養成方法、資格認定に、それぞれの大学の特殊性や個性が反映されています。私は、今後この領域で大学間の協力がとても重要になると考えていますが、その際の混乱を避けるためにも、支援スタッフについての共通理解が必要だと思っています。